・ 1943年5月、シニアー部門の必要にせまられ計画案が作られた。

(1) それをコミッショナー会議で、審議、修正の上1946年10月1日、シニアー部門が発足する。

(1) 1948年 "Senior Scout Handbook" 初刊。

以上、レイノルズ著「スカウト運動」第26章（本誌39年1月号に訳載あり）。

(1) この "Senior Scout Handbook" の後続本が、この "**Look Wide**" A Book for Senior Scouts である。

最近、英国はシニア スカウトとローバースカウトを1本にした Venture Scout (VS) に改編中の由であるが、"Look Wide" は今までどおり、シニアー年令者の必読の書物として重視することに変わりはないそうである。

「Look Wide」とは？

これは、直訳すれば、「広く見よ！または「視野を広げよ！」ということになるが、それだけでは、意を尽くさない。そこで私は、つぎの文献を引用して解明の手がかりとした。

(1) "Look Wide" の緒言、Lord Rowallan の文章から

"Look Wide." It's a good title, isn't it?—and a good motto Senior Scouts.

(1)「ルック ワイド」という、この本のタイトル、まことにけっこうと思います。そうでしょう？ そして（このことばは、シニアースカウトのモットーとしても、なかなか、よろしい）

1。すなわち、ルック ワイド—は、英国シニアーのモットーなのである。

ロウオーラン総長は、この緒言の中で、ルック ワイドということばの意味は、視界を広く、と、いうこともあるが、自分以外の多くの人々に対しての目をひらくことをも意味する、と暗示している。

(2) 本誌、35年7--8月合併号の37ページに、オーストラリヤ連盟の「トーチ」という誌名の雑誌から転載した "Look Wide" の解説が載っている。その大要を分析すると——

(1) シニアースカウトの段階は、ひとから与えられるものを期待するのではなく自分の力でなにかを求める段階に達したのである。

・ 少年部で身につけたスカウティングの基礎をさらに前進させること —しかもで独力。

(1) ルック ワイド—はこの段階でのモットーである。努力と冒険が、これにつながる。

(1) 年長の訓練は、利己的にするのでなく、いつも他の人々を実際に有効に助けるにあることを、じゅうぶん理解せねばならない。

(1) 少年時代の、自己本位を捨てなければ、広い視野は見えない。シニアー諸君、君たちはもう、少年ではないのだ。

(1) 親の助言も必要だが、自分で自分を考えなさい。君自身で求めなさい。そうすれば視野は広くなる。

と、いうように受けとれる。

原本の構成

原本は

総長 ロウオーランの緒言

第1部 人生について

第1章 人生とはなにか ローレンス・ストリンガー

第2章 神へのつとめ ウィルフレッド・ウエード

第3章 心身の純潔 ラムバート牧師

第4章 身体適応性（健全） アルサム・ターナー

第5章 われらの住む世界 ハイネス

第6章 クィーンスカウト章 ジョージ・ウィッチェル

第7章 本運動における シニアースカウトの位置 ハーバート・ブロアー

第2部 戸外活動

第8章 キャンピングとハイキング ジョン・サーマン

第9章 ツレック車をひいての遠征 ブレーク

第10章 海外でのキャンピング・パートン

第11章 岩登りと登山 シューエル・スタイル

第12章 洞窟探検 バッチャー

第13章 自然界 ミカエル・ブロックモア

第3部 批判的態度（鑑賞）

第14章 読書 レックス・ハゼルウッド

第15章 芸術（音楽、絵画、建築） ピーター・トラクストン

第16章 映画、演劇 ジャック・シングルトン

第17章 演技と演出 ラルフ・リーダー

第18章 社交 オライブ・リーマン

第19章 兵役 ローレンス・ストリンガー

付録 活動、作業の示唆 60 種目

以上18人の合作である。

ルック ワイド緒言

チーフ・スカウト

「ルック ワイド」とは、いい名前(本の)ですね。そう思いませんか？ これは、また、シニアースカウトのモットーとして、いいものです。人々の多くは、そう思うにちがいありません。若い人たちにとってはまさにそうで、地平の両端を見わたすことができなくなる結果にまで、深く深く視野をひろげて行くことは、若い人は千べん一律で、例外はないでしょう。けれども、ルック ワイドということばは、広い地平線への展望に、その意味の多くを託すのではありません。諸君は今、なんでも、かんでも実験してやってみようという年令になっています。その対象は、特殊な、専門的なものへの実験ではなく、手あたりしだい、なんでも、かんでもを、です。そういうことになると、たぶん、君たちが、やってみようとしたり、探求しつつある現在の機会よりほかに、熱中すべき機会は、他に決してない、と、いうことになるでしょう。この機会をのがしてはならないわけです。

シニアースカウティング部門というものは、この運動の他の部門が、そうであるように、君たちの手によって出発した部門であります。君たちの手によるのでなかったとするならば、君たちの先輩の手によってスタートされたわけです。まあ、そういったほうが、より適切でしょう。それは、君たちの体力と意志の力、それに忍耐力というものは、君らよりか年下の少年よりも、ずっと、ずっと強くて、それからくる要求なるものは大きくふくれあがって、なんでも、かんでも、やってみたい、と、する欲求をもつから、そういうことになるのです。「ザ・シニアースカウト・ハンドブック」という本は、すばらしい本で、シニアーの訓練が進歩前進した結果生まれた訓練の基礎について書かれた本です。けれども、この本が出版された1948年以後、新しいことを、たくさん経験したので、それらの経験を新しい本で発表したくなりました。私たちは、この新本が君たちの旅路に大いに役だつことを望むものであります。ある章は、もとの本のものを残し、ある章はそれを改定しました。そうでない章は、まったく新しい資料によるものであります。

私は、過去10年にわたるあいだ、シニアーたちによって、彼ら自身の手で開発された、真に、傑出したものが、たくさん、あることを聞いて、身ぶるいもしたしよろこびもしました。彼ら自身で開発したというのは、彼らの想像力と挑戦の受容によってやったものです。その挑戦の受容とは、彼らが、年少隊または少年隊に入隊してからこのかた、長い道を旅してきたということからくる理解(あるいは認識)によるものです。そのかん、たくさんのことを学んだということからくる結果です。けれども、君たちが、いちばん、学ばねばならないことは何か？ それは、君が、自分自身を考えてみることです。ベーデン・パウエルの言を、うのみにすることでもないし、他の人たちの頭で考えたことを、受け入れるだけであってはなりません。型にはまった仕事ならできる人は、いくらでもありますが、当意即妙に頭を働かす人は、たくさんはいません。

諸君は、少年隊のこどもに向かって、スカウトというものは、どのように行動すべきであるかを示すことのできる人たちです。また、スカウティングというものが、充実した生活と有益な生活を、少年たちに与える絶好の機会をもっていることを、示してやることができる人たちであります。お手本で示したり、指導員（インストラクター）として実技の上から援助してやることによって、その機会を最上のものたらしめることも示すことのできる諸君です。

勇んで、おやりなさい！ 目を広くひらいて！ われら、スカウト運動の偉大な兄弟仲間の有用な一員となるよう。君の旅の前途における、よいスカウティングと、幸多きキャンピングとを祈ります。

Rowallan

チーフ・スカウト

（翻訳：中村 知日連嘱託）

LOOK WIDE LOOK WIDE LOOK WIDE LOOK WIDE LOOK WIDE

ルック ワイド

LOOK WIDE LOOK WIDE LOOK WIDE LOOK WIDE LOOK WIDE

第1章　人生とはなにか

ローレンス・ストリンガー

この表題が、ひとつの問題である。すべての人が答える用意をしておくべき問題なのだが、実際には、ほとんどの人があまり関心を示さない問題である。けっきょく、人生の甘味をむさぼり、生命の刻一刻を完全に楽しんでいたら――〝さあ、明日のことなんかくそくらえだ。食べて、飲んで、楽しくやろうや。なんでそんなことを気にすることがあろうか〟ある人はまた、頼みもしないのにこの世に生み出されたのだから、生きている間にせいぜい人生を楽しむ権利があり責任もそこに始まりそこに終わるという。

……さあ、あすのことなんか
くそくらえだ
食べてのんで
楽しくやろう……

さて、多くの新しい血湧き肉躍る経験への門口に立っている若い君たちは、この問題についてどのように考えるだろうか？君たちは、かなり明確な答えをもっているだろうと私は望みたい。そこでこの章の中で、君たちの考えを明らかにし、たぶん君たちの思考にとって示唆となると思われる考え方を少しのべてみよう。

よく耳にすることだが、人生は、君たちが築くものである。一般的にみても、この表現は正しいといえる。したがって、われわれが扱おうとしているこの問題は、無視できない重要なことである。

あらゆる少年と青年が、人生の成功を望んでいるとみなしてよいと、私は思う。ごく小さい頃から、われわれは、それが仕事であれ、遊びであれ、自分のすることに最善を尽くすように教えられてきた。若い陸上選手は駈け足で、自己のタイムを更新しようと努力するし、フットボールの選手はたえずボールを扱う技術とコントロールとをみがき、クリケットの選手は、投手あるいは打者としての技能を高めようと務め、学生は、試験に合格するように、けんめいに勉強する、等等例を上げたらきりがない。人生についても同じことが言える。もちろん、世の中には、この考えに同意せず、この章の最初に述べたような意見に従う人もたくさんいるだろう。――彼らはとれるだけとるが、それに対して、ひとつもおかえしをしないで平然としている。これは哀れな態度であり、多かれ少なかれ、やがては破滅へ通ずるものである。

神がわれわれに生命を与えたとき、神はひとつの目的のためにそれを与えたのだと、私は確信している。われわれがこの世に生まれ出たのは、偶然ではない。それは神の計画の一部である。しかし、神は生命計画の創造主であるとはいえ、自己の生命をいかに全うするかについては、われわれに大きな選択の自由を与えてくれた。この自由があるために、われわれは、自分自身の人生をできるだけよいものにすることができるのだが、この自由を行使したときにわれわれが見落としてはならないことは、われわれが神の助けを望むならば、神は、人生の旅路を進むわれわれをいつでも助けてくれるということである。神は、われわれに未来を啓示してはくれないが、たえず、われわれとともに歩む用意をしているのは事実である。

私は、人生の宗教的な面にふれるつもりはない。私は、人生と神は切り離せない、いや密接に結びついているという私の信念を、早目にいっておきたいのだ。われわれを創造した神は、たえずわれわれを助けてくれるのだということを、われわれは認識すべきである。

それでは、このことを心にとどめた上で、人生におけるどんな要素や影響が、人生とはなにかを考えるのに、実際に関係するのかを、自分たちの心の中で、整理する仕事にとりかかろう。私がこれから君たちに与える提案は、君たちの思考の糧としてもらいたい――中には、結論を君たちにまかせるものもある。

読書や人々との接触によって、われわれは彼らが同胞のために努力した、あるいは努力している事例とその影響力に刺激されて、想像したり、賞讃したりする。彼らを偉大にしている要素はなんなのだろうか？　それは、彼らの人生が同胞に奉仕するという意志を実現してみせたことだと私は思う。彼らは、個人的な利益を考えることなく、この目的のために献身した。アルバート・シュバイツァーのことを考えてみよう。彼は富と名声をもたらすことのできた才能と経歴をもっていたにもかかわらず、中央アフリカの原住民の運命を改善するために人生のすべてをささげた。人間であれば、だれでもこのような無私の奉仕に感動せずにはいられない。自分よりも不幸な人々を助けたいという気持は、たしかにわれわれすべてが持つことのできるりっぱな徳性である。あの有名な団体の TocH（訳者註：1920年ロンドンに創立された、戦友が旧交をあたためるための協会。各階級間の協調と献身的奉仕を重んじた）は、これをうまく要約して、つぎのようにいっている。「奉仕とは、地球上に与えられたわれわれの場所に対して支払う家賃である」と。私はこのことばを君たちにすすめたい。

事実、状況がどんなに困難でも、あるいはわれわれが、どんなに困窮していようとも、われわれの助力を必要とする、より不幸な人々はたえずいるのである。そして、このような助力を与えることによって、われわれは、自分たちの同胞に奉仕するばかりでなく、同時に、自分自身の考えを個人的苦悩や問題からときはなすことによって、自分自身にも役だてているのである。そうすることによって、たしかに、もうひとつの大きな徳性――無私という徳性を伸ばしえる。現在、われわれが生活している世界は、以前にもまして、他人に奉仕する用意のできた青年、いやあらゆる年代の人々を必要としている。機会は無限にある。というのは、なんらかの助力を必要とする人はたくさんいるのに、物質的報酬をともなわないことに、無欲に貢献する心構えの人は、比較的少ないからである。君たちと私が奉仕をする分野はあるだろうか？　私は、真剣に捜せばいくらでもあるということ、そして、人生は他人に奉仕をしているということのためにますます豊かになるだろう――奉仕はだれかの困難な運命を救ってやったり、あるいは、不幸な人々を幸福にしたことからもたらされる大きな満足でむくいられるのである――と私は思う。なんとすばらしい特権だろう。なんとすばらしい挑戦だろう。なんとすばらしい機会だろう！

私がこの問題についてかなり長々と述べたのは、このことが、真の幸福には欠くことのできないものであり、疑いもなく、奉仕と無私の間には、緊密な関係があると感じているからである。少し前のことだが、私がつぎにとりあげたいと思う親切心と他への思いやりとに関係のある１つの実話をきいた。それは乗馬中に背骨を折った12才の少年の話である。医者は手のほどこしようもなかったこの少年のためにできることといえば、ただ痛みをしずめてやることだけだった。とうとう痛みをおさえきれなくなったある日、少年は激しい発作におそわれたが、そのあとで彼は、母親にいった。「小馬がけがしなくて、ほんとによかったね、ぼくだけで！」私は、この物語が、私に与えた衝撃、そして最後の〝ぼくだけで！〟ということばを、決して忘れることができない。このいたいけな少年は、数日後に亡くなった。しかし彼の事例は、自己を捨て他人へのやさしい思いやりの気持が、ひどく欠けている世界にあって、燃えさかるかがり火のように輝いている。――しかも、わずか12才の少年である。これこそ、たしかに、ほんとうの生き方である。

話を進めよう。われわれは今日、独立と個人の自由

について、ずいぶんと多くのことを耳にする。ある人々は、非常に利己的で自己中心主義になり、自分が楽しみさえすれば、他人の権利について、少しもかまわない。しかも、そういうことをしながら、彼らは、弱い、恵まれない人々を踏みにじっている。彼らはいう「他の人々の意見や生き方に気を使えだって。彼らが私の幸福をじゃますれば、私はただそれを押しのけるだけさ」また、自分たちの意見だけが、考慮する価値があると考えている人々もいる。彼らは、耳を傾ければ、経験と道理にかなった話を聞けるかもしれないのに、性急にも人の意見などきこうともしない。つぎのようにいったのは、マーク・トウエンである。「14才のとき、私は自分の父親をばかだと思った。しかし、21才のとき、私は短い人生の間に、父はなんと多くのことを学んだのだろうと驚いた」雅量ということについて簡単に述べてみよう。雅量とは、他人に彼らが意見や特異性をもつことをみとめる寛容さである。われわれが、人々をわれわれのやり方ではなく、その人々のやり方で幸福にさせることができるのは、この大きさである。これは、人間がだれでも持つことのできるもっともうるわしい徳性である。他人の意見を考慮にいれ、たとえ同意していなくても、彼ら自身の意見を持つ権利を認めることができたら、われわれすべてにとって、人生はどんなに幸福なものになるだろう。われわれは、マーク・トウエンのことばを思い出せばうまくやれるだろう。

……自分たちの意見だけが、考慮する価値があると考えている人々もいる……

また世の中には、他人の言に容易に左右されたり、影響されたりするために、自分自身の考えが持てない、あるいは、持っても、ちょっとした口実で、それを放棄するほど弱いものしかもっていない人々がいる。他人の言に耳をかたむけるのは正しいことではあるが、同時に、他人の意見が、われわれのものより良くないと思われたら、われわれ自身の意見と基準を守らなければならない。いつでも大勢にしたがう人間はとるにたらない。特にそうすることが、自分の主義を犠牲にする場合には。それがどんなものであれ、誘惑と困難に立ちむかう勇気は、きっとわれわれが住む世界の道徳的、精神的水準を高める助けとなるだろう。スポーツであれ、人生であれ、逆境や敗北に負けずに立ちむかう人、物質的報酬のために、魂の尊厳を決して放棄しない人は最後には人生から、大きな満足と勝利を引き出すだろう。私の考えは、正しいだろうか？ それとも、私が書いたことは誇張であろうか？ もう少しこのことについて考えてみよう。君たちがもっとも崇拝する人々はだれか？ 偉業をなしとげ、しかもすべてのことは、比較的容易にやりとげた人々か、あるいは、大きな困難と闘い、必ずしもいつも勝利をおさめたわけではないが、人生に自己の足跡を残した人々か？ 南極のスコット・マロリー、オード・ウィンゲード、フランクリン・ルーズベルト、これらの人々はそのほんのわずかにすぎない。他にもたくさんいる。登頂した者も、闘った者も、計画した者もいた。そして、そうする間に、彼らは同胞に人間の不屈の精神を示した。努力は彼らのテーマであった。彼らは、人間の最も偉大な栄光は、決して失敗しないことにあるのではなく、倒れても、そのたびに起きあがるところにあることをくりかえし、くりかえし証明した。これは、人生は、なにを意味するのかを見い出そうとしているわれわれに、彼らが残してくれたメッセージである。

さて、私は、もう1つの問題を諸君にだそう。それは〝自然である〟ことの技巧に関している。このことばは、あらゆる場合に自分自身であることを意味する。たえず自分の重要さを他人に印象づけようとつとめている人々に、われわれはきっと会っている。わざとらしい様子が彼らのまわりに漂っている。それがあまりひどいと、彼に、〝そんなものは捨ててしまえ〟といいたくなる――〝正気にもどれ〟と。このような態度はなんとばかげていることか。見識のある人は、すぐに、彼らの虚飾・卒直にいうと偽善を看破してしまうから。私は、自分の人生経験から、自分自身であろうとすることは、もつことのできるもっともすばらしい徳性のひとつであることを知った。けっきょくりっぱな人生を送ろうとまじめに努力しているならば、人々がわれわれをどう思おうと、そんなことは人生のもっとも価値あるものと比較すれば、たいした問題ではない。これは他人の意見を考慮に入れないということではない。もちろん、われわれは、人に良く思われたいし、世間の人からちやほやされたい。しかし、ちやほやされるのもよいが、えてして、それを追い求めるようになるからこまる。われわれは自分自身であることをめざそうではないか。

少し前のことだが、私は若い人たちが、たった今列席したばかりの礼拝のことを話し合っているのを聞いた。そのうちのひとりは、つぎのようにいった。「礼拝はまったく良かった。お祈りはとても良かったし、讃美歌は気持良かった。それにお説教もわるくなかった。ついでにぼくは、礼拝中にまったく〝敬虔な〟気持になった」と。君たちは、これでいいというかもしれないが、私はつぎのように考える。このことばは一見りっぱそうに見えるが、この青年は、優先順位を全くはきちがえていることを諸君に教えたい。「私は礼拝中、まったく〝敬虔な〟気持になった。ついでに、お祈りも讃美歌も、お説教もよかった」とするのが、この場合、正しかったのではなかろうか。

……わざとらしいようすが彼のまわりにただよっている……

われわれは、ときどき、物事の大小をとりちがえる傾向がある。すなわち、たった今のべた青年のように、重要さの順序をまちがえて、ものごとを理解する。たとえば、よい友好関係を育てるのに熱心な人々の中には、友情というものは、自分自身の家庭や国に始まるのだということを忘れる人がよくある。私は、外国のスカウトとならだれとでも大の仲良しになろうとするのに、彼らが属している隊は、いつも近くにある隊と仲たがいをしているスカウトたちに出くわしたことがある。

私がいおうとしていることがわかるかな？ 問題を進めよう。人生において真に重要なことは、けっきょくなんなのか――富？ 地位？ 衣服？ 話し方であろうか？ われわれが、正直で、卒直で、利己的でなく、他人には親切にし、いつでもこまっている人々を助けられるとしたら、それ以上、とやかくいうことはないのか？ この答えは、はっきりしていそうなものだが、現実の生活の中では、われわれは、いつでも正しい答えを見つけているとは限らない？

ここまで読んできた君たちが、私が書いたもの、私が君たちに示した示唆に、もしなんらかの価値を見い出すならば、生きるという仕事は、たいへん真剣な問題にちがいないと考えていることだろう。私はそう考えるのである。われわれのだれもが、われわれが生きている世界に対し、大きな責任を持っている。この点を立証したのでつぎの挿話でしめくくろう。

人生は、大きな冒険である。私は、このことばで、一しゅん一しゅんがなにか新しいものを見つけ出し、新しい経験をする機会であるということをいいたいのである。

われわれすべてがエベレストにのぼれるわけではない。しかし、隊長ジョン・ハント卿と隊員と、最後に勝利におし進めたと同じ精神が、人生におけるさまざまの戦いにもあるのである。われわれは、彼らがなしたと同じように、未知のものに思い切って挑まなければならない。エベレスト登山隊は、彼らが目的地への途中で出合う問題については、まったく知らなかった。しかし、勇気と努力の精神で、彼らは遭遇した困難ととりくみ、勝利をえた。すべてが終了したとき、隊長は、つぎのようにいった。「これは、価値あることであったか？ この冒険に参加したわれわれにとっては、それは疑う余地はなかった。われわれは非常な努力をわかち合った。雄壮華麗な光景も目にした。われわれの間に、永遠に続く友情をつくりあげ、この友情の実が熟し、成就するのをみた。われわれは、あの山上での偉大な生活の一しゅん一しゅんを忘れることがないであろう。

だが、他の人々にとっては、なんなのだろうか？ これは、彼らにとってもやはり、価値があるだろうか？ われわれが生活している世界においても、冒険が必要であるということがわかってもらえれば、また冒険は単に山上ばかりでなく、非肉体的なものばかりでなく、あらゆる所に見い出されるということがわかってもらえれば、やはり価値があると、私は信ずる。

……われわれのすべてがエベレストにのぼれるわけではない……

最後にエベレスト登頂の意義――意義づけが必要であればだが――は、われわれが、われわれに先立った人人に鼓舞されたと同時に、このできごとに刺激されて、他の人々が彼らの「エベレスト」を捜すことにあるのだろう。冒険の機会はいくらでもある。丘に、空中に、海上に、地下に、海底に、そして月にまでもさがせるのである。

そして月にまでもうかせるのである

高邁な精神に導かれた人間の精神が、到達することのできない高さや深さはないのである。

君たちの「エベレスト」を求め、前進しなさい。そうすれば、君たちが、旅路の途中で、美しく壮麗な光景を目にし、永遠に続く友情を見い出し、君たちの努力がみのり、成就するのをみることができると私は思う。

君たちの人生における究極の答えはなんであろうか？ それは、このようなこと——すなわち、世界は、君たちが生きたために、より良い場所になること——ではないか？ われわれのだれにとってもそうであるよう、神に祈る。

（翻訳：三沢雅嗣日連職員）

ルックワイド

シニアスカウトの標語として英国では"Look Wide"ということばをあげている。広く見よ……とか、視野を広くせよ……とかいう意味だとうけとられる。けれども、それは単に、かけ声だけにとどまらないことに気づく。

それは——スカウティングは、国内だけでなく、広く世界的にひろがった運動であるから、カブからローバーに至る課程(あるいは過程)のなかの、シニアの段階で、Wold Scouting についての勉強をすべきだという意味をこめていると解すのである。

この勉強のお手本は、B-P自身が身をもって示した。その年譜を一覧しただけでも1910年から1938年に至る28年間に、20回の海外旅行をしているのである。そしてそれは彼の力だめしであった。

自分の隊、自分の県、自分の国のスカウティングにだけ力を尽くし、思いをよせていればそれでよいというような、狭い心ではスカウティングの真の大きな姿を発見できないだろう。世界的な市民にはなれない。

われらは、わが国に欠けている広域スカウティングをもりあげねばならない。それは、今後の日本のシニアスカウティングのあり方のいかんにかかっているのではなかろうか？

(LOOK WIDE)

ルック ワイドについて

中村　知

原本についての解説

●"Look Wide"——A Book for Senior Scouts——というタイトルの全巻196ページの本。

それがこの訳稿の原本である。

●初版発行の年月は？

ふしぎにも、どこにも記してない。緒言は、前総長 Lord Rowallan が書いているが、その署名はあっても年月が書いてない。私は、いろいろ手元にある文献で調べたが、全然、わからない。そこで推定した。——1950年だろう——と。それは、下記の筋道によるところの推理からである。

●原本の、カバーの、見かえしに

This is the successor to the Senior Scout Handbook. From that book two or three Chapters have been taken : the rest are new.

と、ある。これが探究の糸口である。

つまり、本書は、"Senior Scout Handbook"の後継（あとつぎ）である。その本から、2～3の章をとり入れた。その他の章は、新稿である——という。

●さて、"Senior Scout Handbook"の初版は——1948年である。そういう点から、私は、たぶん、1950年だろうと推理したのである。

この原本ができるまでの歴史

それは、シニアー部門が生まれる歴史につながる。シニアー部門は、ベーデン・パウエルの死後5年たった1946年に発足した。したがって、この原本"Look Wide"には、ベーデン・パウエルの文章は、ひとつも出ていない。この点、"Wolf Cub.s Handbook"（1916年）、"Scouting for Boys"（1908年）および"Rovering to Success"(1922年）と、いちじるしく、ちがう点である。と、いうことは、シニアー部門は一度流産し、(1916年～18年)その後30年たった1946年10月1日、難産の結果、誕生したことを物語る。

以上の略史を、レイノルズ著「スカウト運動」を土台として、摘記するならば——

○ 1916年、カブ部門の誕生と同時に、15才以上のシニアー部門新設の考えを、ベーデン・パウエルはいだいた。

○ 1918年、政府の教育改革案の補習教育についてのフィッシャー案が出たことが、このことに関係をもった。フィッシャーは、ベーデン・パウエルに助言を求めた。それでスカウト教育は、補習学校とタイアップして考えられた。（これは、明治の中ごろ、日本に青年団が生まれた動機が、小卒青年の補習教育に出発したのと同じ形である）

○ ところが、フィッシャー案は、失敗した。それにともなって最初のシニアースカウト案は流産した。

○ それでも、ベーデン・パウエルはシニアースカウト部門の構想をすてなかったが、周囲の者に押されてローバー部門の新設に切り替えられたことは残念だった（これは、レイノルズ氏の所見）。かくて

○ 1918年、ローバー部門が、シニアー部門に代わって誕生し、1922年"Rovering to Success"を初刊するにいたって、シニアースカウトはローバースカウトの中にのまれる結果となった。

以上、レイノルズ著「スカウト運動」第16章（本誌37年2月号に訳載あり）による。

それから25年の月日が経って——ベーデン・パウエル没後の